

ユリシーズ 第13挿話の考察

Ulysses (1967 film), Produced by Joseph Strick



*あくまで素人の考察なので誤りもあるかと思いますが・・・アマチュアの特権ということでご容赦ください

**加えて本論は性的な描写が多分に含まれますが挿話の理解のために不可欠と考えておりますのでご了承ください。

2021/8/22 ぬしろかずや

第13挿話をめぐる謎

主催者からのメールより

今回は第13挿話を扱いますが、性的にかなり露骨なシーンがあります。
20世紀初頭の出版業界を考えても、そうしたシーンを公開すれば「問題になる」ことはジョイス自身もわかっていたと思いますので、それは物語を書くために必要不可欠な選択となっているはずです。「なぜそうした行為が物語に書き込まれる必要があるのか」、
「そのシーンがあることでは全体のなかでどのような意味をもつのか」を
当日一緒に考えてみたいと思います。

問

- ①なぜブルームはそうした行為(自慰)に至るのか
- ②その行為が全体の中でどのような意味を持つのか

第13挿話は第9～12挿話を経た読者にとっては内容を理解するだけなら平易な挿話である。
しかし主催者の提示する通りブルームの「行為」の意義及びその解釈は難解である

目次

- ・参考文献紹介
- ・猥褻とモダニズム
- ・なぜユリシーズは猥褻なのか
- ・ユリシーズの猥褻さを巡る裁判
- ・なぜジョイスは第13挿話で露骨な性的表現をしたのか
- ・主催者の問いに対する個人の解答
- ・小ネタ

参考文献紹介(amazonのページより)



ユリシーズを燃やせ 単行本 – 2016/7/1

ケヴィン バーミンガム (著), Kevin Birmingham (原著), & 1 その他

★★★★☆ 4個の評価

[すべての形式と版を表示](#)

単行本

¥2,970

獲得ポイント: 30pt

¥480 より 17 中古品

¥2,970 より 16 新品

¥6,685 より 1 コレクター商品

本の長さ



463ページ

出版社



柏書房

発売日



2016/7/1



[この画像を表示](#)

ユリシーズの米国での出版禁止裁判の一部始終を記したドキュメンタリー本
同時にジョイスの伝記本としての性格も有する

ユリシーズ×「猥褻さ」という切り口においては最良かと

第13挿話の性的な描写を議論するにあたり、まずはユリシーズ全編に渡る「猥褻さ」に関して考察
(以下、拙資料5-13頁に記載された(P.##)はこの本の頁を示す)

「猥褻さ」とモダニズム

モダニズムはかたくなな経験主義に反旗を翻していたのだ。科学技術の永続的な進歩、国家権力と商業の無限の拡大、整理整頓されて清潔、常に世間の審査に耐えうる秩序ほの過剰なまでの信頼に対する反旗だった(P.12)



経験主義＝人間の知識は客観的、公的な実験、観察に基づいて得られる経験に由来するという考え方
大陸合理論に対してのイギリス経験論を指すことから、近代イギリス思想に対するモダニズムの反抗を意味する

経験主義の敵は不合理ではない。それは秘密主義だ。経験主義的な文化が利用できないもの、認めたくないものは社会の目から隠され、危険というカテゴリーに分類された。そして、秘密主義の極地が猥褻だった。猥褻はどこまでも無意味なほど個人の領域だ(P.12)

客観的・集合知である経験主義に対して個人的であり秘匿された秘密主義こそその対立項であり、「猥褻さ」こそ個人にとって最も秘密にされるべき事柄なのである

個人主義をモダニズムの一つの源流とするならば、「猥褻さ」は避けては通れないテーマである

ジョイスの個人的な体験および痛みの事例

しかし、ジョイスが何にも増して個人主義の象徴だったのは明らかに、「血と肉に備えた」人間だったからだ。彼自身がそのエロティックな悦びと激しい痛みにとらわれていたためだ。(P.19)



個人的な体験である悦と痛みに関してジョイスは人一番敏感であった。そしてその感覚こそが彼の小説の奥深さをなしている。

ジョイスは虹彩炎の発作を何度も起こし、やがて急激な緑内障とその他の症状に繰返しなやまされるようになり、ほぼ失明するほど視力が弱かった。失明を逃れるために受けた手術もトラウマとなった。ーすべて麻酔なしに行われたのだ。(P.19)

周知の通り常に痛みを抱えながらジョイスは小説の執筆を行った。特に晩年のフィネガンズ・ウェイク執筆に至るまでの苦闘はあまりにも痛々しい

なぜユリシーズは猥褻なのか -なぜジョイスはエロティックな悦びに囚われたのか-



第一次大戦が始まる数年前の1909年、ジョイスは妻ノーラを当時の滞在地トリエステに残しダブリンに一時帰国した。ダブリン滞在中からはノーラと何通にも及ぶ手紙のやり取りをしたがそこで一つの発見をする

ある日の午後、彼はヴィンセント・コスグレーヴに会い、トリエステでの生活について得意げに語った。アドリア海を眺めながらコーヒーを飲み、ノーラの待つ自宅に帰るのだ。お前はノーラという妻がいて幸運だ、とコスグレーヴは言った。自分も1904年には国立美術館の正面階段の前で週に何度かノーラと会う幸運に恵まれた。ふたりでリングズエンドまで歩いたという。

ジョイスはその意味を考えると混乱した。確かにノーラに会えなかった夜は何度もあり、フィンズ・ホテルがそれほど混んでいたはずがない。ジョイスが自室で手紙を書いているあいだ、ノーラは同じ道をコスグレーヴと歩いていたのかもしれない。ノーラは自分にささやいたのと同じ台詞をコスグレーヴにささやいたのだろうか。あるいはそれ以上のことに及んでいたのだろうか？

ジョイスは妻に手紙を書く前に計算した。最初に肉体関係を持ったのはダブリンを出た3日後、1904年10月11日だ。ジョルジオは7月27日に生まれた。9ヶ月と16日だ。（嫉妬に燃える心にとって、2週間がなんだというのだろうか？）彼はホテルのベットの血の染みがやけに小さかったこと、赤ん坊が、予定よりずっと早く生まれたことを思い出した。ダブリンの父の家の二階でジョイスはペンを手にとった。「ジョルジーは僕の息子か？」と彼は書いた。「お前は僕のもとに来る前、誰かにファックされていたのか？」暴力を軽蔑するジョイスが、男の心臓の鼓動を弾丸で止めたくなっていた。(P.182)

なぜユリシーズは猥褻なのか -なぜジョイスはエロティックな悦びに囚われたのか-



トリエステからは二週間近く音沙汰がなく、ジョイスはエクルズ・ストリートの小さな家に住む友人ジョン・バーンを訪ねて泣き崩れた。バーンは後にあれほど打ちのめされた人間は見たことがないと記した。彼はジョイスの話に耳を傾け、すべてが「嘘っぱち」だと言った。夜の街を一緒にあるいたろくでもない友人のコスグレーヴとゴガティは、ジョイスの幸せを壊そうと画策しているのだ。嫉妬しているのだろう。バーンが正しかったことはさておき、ジョイスは聞きたかった話を聞くことができた。バーンの慰めの言葉はその夜、疲れきったジョイスの肉体に染みこんだ。彼はエクルズ・ストリートに泊まり、翌朝新たな気分で目を覚ました

ジョイスはノーラに許しを乞い、恐らく人生で初めて強固な優越感が崩れ去るのを感じた。家と祖国、教会をなんとか振り捨てようとしていた反逆児の個人主義者は、無力感なや救いを見出した。ノーラは自分のことを「手の中の小石のように」捉えているはずだ。彼女の前に小さくなるのは自分より大きな何かの存在を感じることで、畏敬の念にも近かったーエゴが割れるとそんな気持ち起きるのだ。最初の散文に描いた「人生の激流の只中で彼を立ち上がらせる」幻の女性のように、ジョイスはノーラが自分を作家にしているのだと思い、そのことで彼女を崇めた (P.182)

困惑、恐怖、安堵を通じて自らの思考に大きな変化を感じるジョイス
この一連の感情の起伏は妻ノーラの猥褻なシーンを想像したことに伴う
⇒ジョイスへの啓示でありこれが彼の作家性に大きな転換をもたらす

なぜユリシーズは猥褻なのか -なぜジョイスはエロティックな悦びに囚われたのか-



ノーラと離れて過ごすのはこれが初めてで、ジョイスは定期的に手紙をかいた。(中略)
ジョイスは頭の中に湧き上がってくる常軌を逸した想像をノーラに語ろうとしなかったが11月末の手紙では、こんな文書を書いて欲しいのだとか、仄めかした。彼女にリードして欲しかったのだ。(P.184)

ジョイスの手紙はほとんど今でも残っていて、1909年12月に手紙は進化してみせた。彼が忠誠に誓ったことによる効果の一つは、我を忘れるのを可能にしたことだった。「お前に対する精神的な愛情の中には」とジョイスは書いた。「お前の体の隅々まで欲する獣のような欲求がある。すべての秘密と恥辱、すべての匂いと反応を」(中略)

ジョイスは言語の限界に挑み、そうすることで何年間も越えられなかった垣根を越えようとしていた。(P.185)

ジョイスの過剰な言葉はわざわざ自身の拒絶というリスクを冒しており、封筒で彼女からの返信が届くとますます劇的な返事を書いた。ノーラ・バーナクルは猥褻に振る舞うのを許すことで最も高貴かて高尚な文章に彼を導いたのだ。(P.186)

手紙を書こうと腰を下ろすと「野生の荒々しい獣の狂気」がジョイスを包み、言葉それ自体の世界から引きはがす役割を果たした。猥褻な言葉は猥褻な思考と一体になった。ジョイスの性的な想像の典型は（そして彼の最も芳醇な年月の文学的想像の源泉は）ノーラが卑猥な言葉をささやき、彼女の口がそれを形作るのを考えることだった。(P.186)

前頁で得たエピファニー(突然の閃き・啓示)を基に
妻ノーラに徐々に過激で猥褻な手紙を送るジョイス

なぜユリシーズは猥褻なのか -なぜジョイスはエロティックな悦びに囚われたのか-



ユリシーズはノーラのための物語だった。彼の書いている本は―すべてを語ろうとしていた本は―初めて過ごした晩の記念だった。ジョイスがユリシーズの中で永遠の生命を与えた一日は、波止場を越えてノーラと歩いた日で、初めて二人きりで過ごした日だった。1904年6月16日。彼が原稿に書きつけた単語の一滴ずつが、その人目を避けた一日をより不滅なものにした。ユリシーズは彼の最後のラブレターだった。(P.189)

ジェームズ・ジョイスがノーラ・バーナクルが交わしたエロティックな手紙は、近代文学のひそかな源流の一つだ。ここでジョイスは言葉そのもののエピファニーを体験したのだから。最も卑俗な言葉の魂が、書くことの究極の力は愛情と同じように作家の無力さをあらわにするなと気づかせた。(P.190)

猥褻な文章と切り捨てずそのやり取りに応じた妻ノーラのおかげでジョイスは作家として大成した。

問：なぜユリシーズは猥褻なのか

答：ジョイスは「猥褻さ」こそが個人の感情・内面を最も突き動かすことを見出したため。

また彼はその実践をダブリン・トリエステ間での妻ノーラとの手紙で行うことで偉大な作家へと大成した

ユリシーズの猥褻さを巡る裁判 -ユルシーズはポルノ小説か現代の古典か-



米国では「ユリシーズ」の「猥褻さ」を巡り出版停止を求める裁判が行われる

被告(ユリシーズを発禁処分にするべきではないと主張)

アーンストの議論の要は「ユリシーズ」が現代の古典で、古典が猥褻であるはずがないという点であった。ジョイスの性的な表現を擁護する代わりに、議論の土俵を変えようとしていたのだー猥褻裁判は文学の価値に関する裁判になる。(P.395)

一部の表現には「猥褻さ」があるがそれは小説の構成上必要不可欠なものである。
そして「ユリシーズ」は至高の芸術作品(=現代の古典)であることから出版停止にするべきでないと主張

原告(ユリシーズを発禁処分にするべきと主張)

「ユリシーズ」が発禁されなければいけない理由は、まさに最上の技法を持って猥褻が織り込まれているからだ。それはどこまでも猥褻で、どこまでも傑出した小説だった。(P.419)

「ユリシーズ」とは文学の仮面を被ったポルノ小説である
それら猥褻な描写は人々に悪影響を与え墮落させると主張

ユリシーズの猥褻さを巡る裁判 -ユルシーズはポルノ小説か現代の古典か-



担当判事ウルジーは断片的には猥褻と捉えられる「ユリシーズ」の全容を理解した上で判決を下そうと試みる

判事の苦悩

1933年秋のピータースハムへの小旅行は休暇が目的で「ユリシーズ」に関する議論を聞く準備を整えるつもりだった。

だがそれは自分が足を突っ込もうとしているものの正体を知るまでだった。後に彼は「ユリシーズ」を読むのは「およそ自分の人生で最も難しい二ヶ月だった」と語る

「ユリシーズ」の一部は芸術的で、輝かしくもあった。他の部分は不可解あるいは単純につまらなかった。

本の大半はセックスと何の関係もなかったが、実際に関係のある箇所は彼が今まで読んだどんなものよりも酷かった。

ウルジー自身は体面を捨ててまで一彼の判断とその名前まで一ポルノかもしれない小説を支援するか、自由を巡る闘いに誇りを抱くこの国で天才の作品を発禁とするか、選ばなければならなかった。彼は二つの暗い未来像に動揺した一ウルジー家の先祖と何世代もの子孫の顔に泥を塗るのだ。彼にはシェリーより強い何かが必要だった。

(P.408-414)

「ユリシーズ」の難解さに苦悩する判事

ユリシーズの猥褻さを巡る裁判 -ユルシーズはポルノ小説か現代の古典か-



判決文

「ユリシーズ」の過剰なまでの内容は性的なものとは関係ないといった。もしそれが何かと問われたら「どこかしら悲劇的」で「男女の内面に力強く言及したもの」だった(P.426)

ジョイスの試みは一私が見るかぎり、それは驚くほどうまくいったようだ一万華鏡のように移り変わる印象を運ぶ、人間の意識をいかに見せるかとうことだった。まるで上書きした羊皮紙、パリンプセントのように。それは身の回りにある実際のものを人はどのように見るかという焦点にだけでなく、過去の境界線上にある残り滓の中にもある。そのうちいくつかは最近のもの、いくらかは無意義の領域からでたものだ。(P.428)

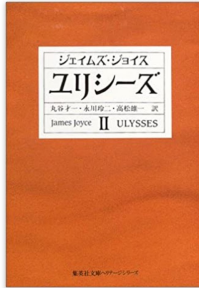
多くの箇所は醜悪にも思え、先に述べたように多くの言葉は低俗だが、低俗のために低俗であろうとする箇所は見つけられなかった。小説の単語のひとつひとつはジョイスが読者のために設計しようとしている絵のモザイクのような役割を果たす…このような言葉の偉大な芸術家が（ジョイスがそれであったことに疑いの余地はない）、ヨーロッパのある街の下位中産階級の真の姿を描き出そうというとき、米国の市民がそれを合法的にみてはならないことがあるだろうか？(P.429)

現代の古典となったユリシーズ

判決文はユリシーズの価値を確かに説明(1930年代当時に上記の解釈ができた判事に脱帽)

モダニズム文学にとって記念碑ともいえる判決

なぜジョイスは第13挿話で露骨な性的な描写をしたのか



露骨な描写①：自慰をするブルーム -なぜブルームは自慰をするのか-

風呂の中でやらなくてよかったよ(U-Δ, 13 453)

それにどうやらおれは。そうだおれは。風呂の中でやろう。(U-Δ, 5 210)

ブルームは第5挿話で浴場での手淫を試みようとする(結局しない)

直前の描写からこの時はマーサの手紙に欲情しての手淫と考えられる

⇒マーサの手紙に端を発し、この日ブルームの意識内には常に性的関心がつきまとう

《肌着》が刺激するんだ。彼女の《部屋着》の下の曲線をさぐっていた。着た時も女たちは興奮している。(中略) われわれ男だって。あいつのネクタイ。あいつのしゃれた靴下や折り返しつきのズボン。はじめて会った夜あいつはゲートルをつけていた。(U-Δ, 13 455)

ブルームはガーディのスカートの奥に欲情しつつも、妻モリーのことを想像することで自慰へと至る

なぜジョイスは第13挿話で露骨な性的な描写をしたのか



露骨な描写①：自慰をするブルーム -なぜブルームは自慰をするのか-

ではなぜ、妻がいるブルームは妻とのセックスではなく、自慰で自らの性的欲求を満たそうとするのか？

死んだルーディのときは初めから長くもたないと見抜いていた。(U-Δ, 4, 166)

ねえ、ちょうだい、ポールディ。ああ、あたしもう、たまらないわ。かくて生命ははじまる。(U-Δ, 6, 222)

ブルームは妻モリーを愛し、彼女自身に魅力を感じている。
しかしルーディの死後、トラウマから彼女とセックスすることができない
(詳細は後の挿話/特にモリーの独白にて語られる)

ブルームの自慰とは彼の行き場のない性的欲求の発露であり
(この日ブルームの頭の中/意識の流れの中には常に性的なことが頭にある)
同時にモリーとの悲劇的な夫婦関係の象徴である

なぜジョイスは第13挿話で露骨な性的な描写をしたのか



露骨な描写②：スカートの中をブルームに見せるガーディ
-なぜガーディはブルームにスカートの中を見せるのか-

ブルームは第5挿話でトルコ風呂にて自慰を試みるが失敗している。
⇒マーサの手紙とそれに伴う想像だけでは行為に至れなかった

第13挿話では①にある通りこの場面でブルームが自慰をすることが物語上必要である。
そこでブルームは妻モリーが寝取られる姿を想像しつつ、現実的な性的刺激であるガーディのスカートの中を
観察することでついに自慰へと至る。

主催者の問いに対する個人の解答



問

①なぜブルームはそうした行為(自慰に至る)のか

マーサの手紙をもらって以降、この日ブルームには常に性的な興奮を感じていた。

1日中、それを解放する手段・場所を探していた彼は、ガーディによる施しを通じてついにそれを達成した。

(自慰を終えることで、この後の挿話ではどのような変化が彼に生じるか)

②その行為が全体の中でどのような意味を持つのか

- ・自慰という具体的な行為を記述することで、この挿話以前のブルームの思考・行動に整合性を持たせる役割。
(その行為から彼の1日の思考に解釈を与える)

- ・自慰という極めて個人的な出来事を記述することでブルームの内面に極限まで迫ろうとした。
(思考・意識をなぞる以上に「その行為」を描くことでその人物が何者かを語る)

- ・モリーとブルームとのセックスを描くわけではなく、モリーが寝取られる姿を想像した彼の自慰を描く。

これによりブルームの内面に潜む苦悩・葛藤・悲壮感を表現している。

(セックスは相手を伴う行為であるが、自慰は一人で行う行為である。そのため自慰とはどこまでいっても孤独なのである)

小ネタ：風の谷のナウシカとの関係

オディセイア：ナウシカアは海岸に血塗れで打ち上げられた瀕死のオデュセウスを他の人々が逃げ纏う中、介抱する。

風の谷のナウシカ：宮崎駿は主人公ナウシカの名前を慈愛に満ちた女性としてナウシカアからとる。
彼女は他の人々が恐れる王蟲に対し慈愛の心で接する。

ガーディ：構図としてはオディセイア、風の谷のナウシカに同じ。慈愛の少女ガーディは中年男ブルームを慰める。
ナウシカアは王女であることからプリンセスに憧れるガーディに重なる。



小ネタ：花火

直立・膨張・発散：花火はブルームの勃起、射精の象徴として記述される

■ 自慰＝射精を用いた表現技法

射精は精子を体外に放出する行為であるが、
精子＝自身の分身と捉えると内なる自分を世界に対して表現する行為に置き換えられる。

■ ダブリン市に打ち上がる花火

ボイランとモリーの関係に苦悩するブルームの悶々とした自我は
花火を通じてダブリン中に降り注がれる



<https://www.alamy.com/stock-photo/millennium-dublin-fireworks.html>

小ネタ：ガーディを待ち受ける過酷な運命

若い女性は結婚願望を抱いているが、それは思春期特有の感情だけでは説明できない。結婚は生活を保証してくれる手段だったのである。女性の雇用機会はきわめて少なく、職のない女性の最善の方法は結婚であり、もし結婚できなければ、家族の面倒になるか、修道院に入るかあるいは娼婦にならざるをえなかった。しかし結婚の機会も少なかった。大飢饉による人口減や産業不振のために結婚率がきわめて低かったところか、ますます低くなりつつあったのである。15歳以上の女性の未婚率は1881年、1891年、1901年においてはそれぞれ47.7%、50.8パーセント、52.7%であった。

結城英雄 『ユリシーズ』の歴史的背景 *EUREKA*, July 1998